

水野源六家と加賀金工(1)

黒川 威人

はじめに

水野源六家の名を知るものは、今日では一部の専門家を除いて稀有であろう。

だが、旧加賀(前田)藩域内で江戸時代に発生した伝統産業(ここでは主に金属工芸)を考える上でこの家の存在を抜きに語ることは出来ない。なぜなら江戸時代には、工芸の中でも武士の必需品たる、武具に関わる金属工芸がもっとも重視されたことは明らかであり、そのデザインの中心をなす彫金の、元締め的存在がこの水野家だからである。

すなわち水野源六家は、かつて白銀職と呼ばれた装剣を主とする彫金師の棟取役を勤めた家柄であった。

現在、初代から数えて当代の水野旺氏(石川県工業試験場情報指導部勤務)で十一代目(四代から十代に至る間はすべて養子である)となる。ただし旺氏は源六を襲名しているわけではなく金工を職としているわけでもない。にもかかわらず、仕事の性質は連綿と受け継がれている部分が少なくないと筆者は見ることが、それは一工芸職人(デザイナー)としての職分を越えて、産地あるいは職人集団指導のディレクター(親方)としての役割りではないかとおもわれる。それが江戸時代初期から幕末、そして明治、大正、昭和を生き抜いて連綿と続いてきた秘密であろう。

この水野家の歴史上の事歴を順次書き記すならば、それはとりもなおさず石川県の工芸・工業デザイン史の一端をなすと言っても過言ではない。本研究は、水野家に残された古文獻資料を中心に、金沢美大に寄付された木型や図案帖などの資料、および散在する作品類

を検討し、それを広く美術や工芸、産業の分野における様々な動きと比較検討することにより、水野家十一代を当地方の工芸・工業デザイン史の一端に位置づけようとするものである。

本稿では、水野家に残された由緒書(職工由緒/市立図書館蔵)と十代光晶(朗)の書き残した文献、および当代旺氏からの聞き取りを一応のよりどころとして、若干の考察を加えながらその大まかな流れをたどった。

■ 1 元祖から三代まで

由緒書によれば元祖は摂州大阪の人で水野源次好栄といい豊臣の武士であったが、天下の趨勢が徳川に代わる頃、武士を捨てて京都に移り白銀師を志して後藤光乗に入門、長乗にも師事した。

やがて師家と既に密接な関係にあった前田家二代利長の御用を勤めるようになり、その後5人扶持を頂戴して、源六、源七の息子共々一家を上げて金沢へ移住している。慶長年間のことと一説に14年(1609)⁽¹⁾とある。これが正しく、しかも源六の没年と行年が正しいものとする、初代源六は三才のとき金沢へ来たことになる。由緒書では利長のお供をして金沢へ来たことになっているが、慶長14年とすれば利長は富山城の火災で魚津へ移り、続いて高岡に築城する年であり間違いであろう。

この辺りはどこまでが本当か確かめるすべもないが、恐らくは後藤家の先遣部隊として送り込まれたもので、水野一家だけの心細い旅ではなかったか。想像をたくましくするならば、武芸よりも絵心があり、もの作りの好

きな真面目な父親像と、その血を受け継いだ男の子二人が、幼少より苦勞しながら父の後を継いで彫金師の道を歩き始める様がほうふつとしてくる。

●初代源六好房（元祖好栄の次男）が分家独立するのは寛永元年（1624）のことであり当年18才のときである。

寛永年中に三代藩主利常より5人扶持を賜り白銀職御用を承っている。御用は頻繁に承ったようで、毎年正月5日には年頭の御目見にあずかり、参勤交代のときはお見送りや、お出迎えにも出ているが、これは後の御細工者の仕事内容、処遇と同じである。

御差料（腰に差す刀）や御好みの重要な仕事を数多く受け、軍の武器などの定式のものも毎年数多く仰せ付かっている。これらのことから確かな腕としかも納期などを確実に守る真面目な人柄が窺える。

ところで水野家から金沢美大に寄附された刀の縁の木型にはたいてい源六（まれに源六郎）の名が墨書してあるが、中に一点だけ一度源七と書いたものを上から源六に書き改めたものがあり、さらに頭には一点源七名のものがある。（写真-1）源七、源六の兄弟がまだ父好栄の下で一緒に仕事をしていた頃の兄源七のものであろうが、初代源六が分家した際つい紛れて持って出たものかもしれない。

唯一兄弟揃っての仕事ぶりをしのばせる遺品であるが、当時は仕事の受注に当たっては原寸大の木型に直に図柄を描いたものを用意していたことが分かる。

寛永16年（1639）には利常が隠居し小松へ移るが、家督を相続した四代光高からは先代同様の処遇を引き続き受けるとともに、小松へも度々出向いて御用を承っている。よほどの信頼を受けていたものであろう。

最前の縁頭の木型で見ると、細筆を使って見事な図案を描いてあるものがこの初代のものようだが、具象的な図柄に限られる。

なお、高岡町の武土地の一角に邸地を賜っ

て別家を構えるのは正保3年（1646）のことだが、この屋敷は明治3年に八代源六が売り払うまで代々が居住している。

こうして初代源六は、利常（3代）光高（4代）綱紀（5代）の3代の御用を64ヶ年の長きにわたって勤め上げ貞亨4年（1687）82才で病死している。

ところで、初代源六存命中に一大事件が起こっている。師家の後藤九世程乗が利常の代から給されていた150石を程乗の名跡を継いだ悦乗がそのまま受け継ぎ、上後藤の演乗と交代で1年おきに金沢に在留して勤めていたが、許しを得（一説に幕府の命により）⁽²⁾途中から江戸へ帰ってしまい、以後後藤家からの出張指導は廃止となったことである。このため、印判を捺したり、礼銭を受け取るなど宗家の表向きの御用はすべて源六家が代行することとなったのである。

ここで、後藤家とは室町時代の名工、後藤祐乗に始まる日本の金属工芸の宗家をなす一大家系であるが、貨幣の冶金やデザインに関わっていたこともあって時の支配者と常に密接な関係を保っていた家柄である。

従って安土桃山時代には織田、豊臣に仕えたが、この頃は既に徳川から山城の国に250石の知行を受け、江戸詰め料として20人扶持を給されていた。

江戸へ下った宗家五代徳乗は以降下後藤家をなし、京に残った弟の長乗は上後藤の祖となったのである。利常の代からこの両後藤家が隔年交代で金沢へ出張して指導に当たっていたのであった。

こうした状況下では、当時、格式あるデザインはすべて後藤家の許可なしには使用できない状況にあったと考えねばならない。したがって、同家の表向きの御用の代行を任せられたことは、水野家にとってはその後の金沢における利権の保証を受けたも同然であり、同時にその利権を守っていく立場にも置かれたということである。

なお、悦乗が江戸へ帰るに当たり、水野家の本家筋である源次家でなく、なぜ源六家へ後事を託したかであるが、当時二代源次（すなわち兄源七）は既に寛文7年（1667）に亡くなっており、逆に源六は非常な長命であったところから、既に60歳も半ば過ぎとはいえ、なおかくしゃくとして仕事に当たっていたと見られ、業界の最長老として元締め的な存在であったからと考えられる。このことについて十代朗が同家に伝わる『諸国白銀細工家図盡』中にその理由を「源七は利長公に従い高岡城に居住せるためならんか」とメモしているがこれは年代的に矛盾しており誤りであろう。

●さて、二代源六照喜はこの偉大な初代の存命中に藩御用を仰せ付かり、貞享4年（1687）の初代没後家名を継ぎ、初代同様町地諸役御免許³⁾となり、奥納戸御用など数多く仰せ付かっている。具体的品目として初めて御献進物とあり三所物（目貫、小柄、筭）鐔が記載されている。なお扶持は2年後の元禄2年（1689）に頂戴と記されている。

先代同様御細工所において武器や軍の定式の仕事を数多く勤め、寶永元年（1704）には御細工所に召しだされ、兜の前立てなどの御用を勤め褒美に銀子を頂戴している。また六代吉徳の嫡子勝丸の弓初めに当たりお弓土蔵役所の御用を勤めているが、この役はこれを初出に以後何度も先例を持って同家へ仰せ付かっている。（具体的にどの用な仕事か不明だが、恐らくは後藤家からの伝授による格式に関するノウハウではなかったか。）

二代源六照喜は綱紀（5代）吉徳（6代）の御用を55ヶ年にわたって勤め上げ元文2年（1737）9月74才で病死した。

●三代源六多光は通称源六郎、享保9年（1724）4月先代同様、父存命中に御用を仰せ付かり、元文2年（1737）に家名相続、寛保2年（1742）4月町地諸役御免許となっている。なお元禄2年（1689）に扶持を頂戴とあるが、これは

先代が扶持を受けた年であり、三代はまだ生誕前であって明らかに誤記である。

奥納戸御用や、御細工所の武器、軍用品、御献進物の三所物や鐔なども同様に仰せ付かっているが、特筆すべきは寶暦元年（1751）に表納戸の御用で、北野天満宮へ献納の宝剣の金具製作に当たり、首尾よく出来て金子を拝領していることである。また同年、神護寺へ寄付された太刀の製作にも携わっている。この両方の仕事に源六のほか後藤七兵衛、桑村源左衛門の両名が携わったことが記されている。この後藤七兵衛は越後の出自といい、通称加賀後藤と呼ばれる家柄⁴⁾であるが、宗家とはどのような関係かあいまいなため、三代後（9代の時）に、後藤東乗が来沢の折り問題を起こすことになる。もう一人の桑村源左衛門は、いうまでもなく桑村家中興の祖とされる克久のことであって、「伝来の家風に自己の意匠を加え、形式の斬新と、鑿痕の鮮麗は、当時類を絶ちぬ」（稿本金沢市史・工芸編）と賞された名工である。この頃は江戸では既に町方彫りが主流になっていたことでもあり、後藤流とは異なる源左衛門の仕事を目の当たりにした三代源六は大いに刺激を受けたのではあるまいか。

三代源六多光は吉徳（6代）から重教（10代）までの5代に渡って37ヶ年の御用を勤め、寶暦10年（1760）2月に病死している。行年59歳であった。

なお、通称の源六郎は前記『諸国白銀細工家図盡』では同一筆跡で、初代から三代まですべて源六郎と記載されているが、奥付に「この記帳は寛政以後の代々の覚書云々」とあるので四代の記入と見られ、養子である四代は一～二代のことにはあまり通暁していなかった為かと思われる。ただし水野家には慶応二年の大福帖が残されているが、これには水野源六郎の署名があり、当時源六と源六郎は通常は同一視されたかとも思われるが確かなことは不明である。

■四代から七代まで

四代源六光政は通称源三郎。旧姓は大河端でこの代より養子となるが、藩からの御用はほぼ同様で、義父存命中の寶暦7年より御用を仰せ付かり、同10年（1760）3月に家名相続している。変わった出来事としては、寶暦9年の大火のさい、將軍家より伝来の御長巻（柄の部分の長い太刀）が残らず焼けたので、これを刀鍛冶に鍛え直しを命ぜられたが、源六ら数代に渡って御用を勤める職人らが、長巻の寸法や作り方を知っているのも後世の見本になるよう作らせてほしいむね願ひ出たところ、許され明和3年（1766）にでき上がり差し上げた、との記述のあることである。右相勤め候人々として研ぎ師、鞘師、金具師、柄巻師の4人がチームになって兼久、清光の二振に計8名が記されている。

ただ不思議なことに金具師の名は源六ではなく源七と読めるが、これは単純な記載ミスなのではあるまいか。

天明5年（1785）には藩主重数（10代）が白銀彫り物細工を御覧になるというので、金谷御殿において素赤がね（素銅か）の縁がしらに寿の文字を彫り、地合には魚々子⁽⁵⁾（ななこ）をとの仰せのとおりを作り、褒美として金子を頂戴している。ここで注目されるのは藩主みずからが魚々子を、との注文を出していることである。装剣奇賞によれば、地合には魚々子がかもっとも格式が高いとされており、そうした教養から、地合は何に致しましょうと問われ、とっさに魚々子を指定したものと考えられるが、これを工業デザイン的な視点で眺めると、魚々子は滑りにくいという機能的な特徴を持っており、武具という極限状況で使用されるもののデザインには、もともとは機能的な優先された名残と考えることができる。また、この技術は特殊であるところから、後世次第に専門技術化していくのだが、四代源六は当時あらゆる技術に通暁していたということであろう。

同8年（1788）には本阿弥家へ太刀を研ぎに出されたが、その金具の手入れ（お清め御用）を仰せ付かっている。このとき作業用にわざわざ仮家を用意していることが興味深い。格式高い本阿弥家への配慮であろうか。

寛政元年（1789）には故重数の霊堂の唐戸の金具の仕事をしているが、鉄地にご定紋、葉唐草の銀象眼に仕上げている。これは白銀師といえども鉄地を扱い、また建築、建具の金具をも扱ったことを示している。

同5年にはお細工所の特別内々の仕事で、印章を依頼され、3月17日から4月5日まで連日役所（御細工所か）へ詰めて仕事をしている。寛政11年（1799）には奥納戸から、累代御用を勤める者たちへ御指し料拭い御用（藩主の刀の手入れのことか）を毎月3日に仰せ付けるから大切に勤めるようにとの仰せ付けがあり、目録を持って金子を頂戴している。

なお、この年正月に書き立てを持って扶持（2人）を頂戴しているが、家名相続後、実に39年後のことであり、活躍の割りにはその時期が異常に遅いのがいふかられる。

同12年には北野天満宮へ献納の宝剣を作る仕事を、寶暦年中に仰せ付けられた前例に基づいて、絵形を差し上げるところまでしたが病気のため仕事ができず、代理として駒井仁助、高尾吉助の二人を加えている。この時の絵形（図面）は現存しているが⁽⁶⁾、日付は享和元年（1801）3月22日である。図面中に鐔の絵形があり、その中に後藤久清判、水野多光判、桑村克久判と銘を記してあるのは、先代のときはこのようであったという雛形の意であろう。

このほか御差料など重要な仕事をしばしば仰せ付かったが同年12月病死した。行年61歳であった。

なお、四代存命中には絶家していた水野源次家再興のための世話をするなど、弟子や一門の世話をよくしているのが目に付く。

●五代源六光益も養子であり、先代の門人

鈴木光弘の次子である。初名源太、あるいは源太郎と称した。先代同様に義父存命中の天明8年(1788)より御用を承り、享和元年(1801)家名相続、5年後には歴代と全く同様に町役御免許となり、奥納戸御用、御差料、毎年の武器や軍の定式の御用を承っている。

文化4年(1807)には御細工所より見本に差し上げた長巻きに対し、値段を算定するよう仰せ付けられ見積もったところ、あまりに高価なので重ねて詮議のうえ、明和年中に御冥加(銀)を出した者どもへ仕事を仰せ付けられた、とある。この頃は藩財政も苦しかったのであろうが、昔どおりの由緒正しいものを作るのは御用職人だけとあって、見積りもかなり法外な価格が出ていたのであろう。それにしても、過去の冥加銀の有無で発注先を決めたところがいかにも藩財政の苦境を物語っている。

右御用仰せられ候人々とあり次の8人の名がある。

研師	嘉右衛門跡半蔵
高良	又之丞
鞆師	九蔵
同	長蔵
水野	源六
後藤	七兵衛
柄巻師	弥助
同	忠右衛門

この内、研師の嘉右衛門初め鞆師九蔵、柄巻師弥助、同忠右衛門および後藤七兵衛は三代のときも源六と組んでいる。また、鞆師九蔵の次男は先代源六の斡旋で水野源次家へ養子入りし、源次元房として同家を再興したことが先代の歴に記載されている。これらのことから御用職人集団は結束が固く、仕事の請負いに当たっても今日の企業合同のような形で共同受注を行っていたことを窺わせるが、格式ばった仕事が多く、創意工夫よりも故実、前例などの方が優先された当時の状況を物語っているといえよう。

なお、扶持(2人)を頂戴するのは文化5年(1808)12月であり、年齢は44歳であって先代に比べればましとはいえ、歴代に比べるとかなり遅い。

こうして五代源六光益は、治脩(11代)齊廣(12代)の2代に渡り21ヶ年の御用を勤め50歳で病死している。水野家累代中では短命の方であった。

●六代源六光則は柄巻師北川長蔵の弟源蔵であって同じく養子であるが、歴代同様に義父存命中より御用を承り、家名相続の三年後文政2年(1819)に扶持を頂戴、5年後には町役御免許となり、奥納戸御用を仰せつかって、御差料ほか毎年の武器や軍の定式の御用を承っている。また両納戸から三所物やご進物の罠などの御用を承っている。

さらに勝千代(後の13代藩主齊泰)の弓初めに当っては、享保年間の勝丸の先例に習って御用を仰せ付けられ、8月には藩主齊廣(11代)が勝千代に持たせる衛府(皇居護衛役)の金(こがね)作りの太刀(刀身は則光)の御用を承り、褒美を頂戴している。

なお、これまではこうした太刀の制作は京都へ仰せ付けられていたが(上後藤家であろう)この度は各職それぞれが(京都へ)入門し技術を習得してきたので、初めて当地ですべて出来た、との記述のあることが注目される。衛府の太刀はそれまでは藩内では作らせてもらえなかった訳であり、後藤家のこの分野での独占ぶりを示すものといえよう。

文政6年(1823)に竹沢御殿が完成。このとき藩主齊廣が能を舞い、思いがけず御用職人らが拝見の榮に浴している。天保7年(1836)には再び衛府の金作りの太刀の製作に当たり褒美を頂戴している。

この太刀は来国行の刀身で、七宝流し螺鈿入りという豪華なものだが、現物、絵図面とも前田家伝世で現存している。(写真-2)

罠には銘が切っており源六光則のほか、鈴木長左衛門光弘、鈴木孫七義敬、と並んで水

野源吾光忠の名が見られる。最後の、光忠は後の七代源六であって、このように重要な仕事には後継者を参加させることで技術の伝承を図るとともに、御用職人としてのキャリアを身に着けさせようとしたものであろう。

このほかにも重要な仕事を齊廣（12代）齊泰（13代）の2代に渡って数々勤め、天保9年（1838）11月52歳で病死している。

●七代源六光和は同じく養子であり、旧姓は高尾、名を源吾という。諱は先の鐔の銘で見ると当初は光忠と称していたようだ。文政9年（1826）歴代同様義父の存命中より諸役所の御用を承り、天保9年の家名相続後も、御差料やご進物の三所物、毎年の武器や軍の定式の御用を同様に承っている。

また天保10年（1839）の犬千代（後の14代藩主宗辰）の弓初めに当たっては、やはり享保の先例に習って御用を勤め、同12年3月には奥納戸の御用で備前盛重の太刀を、4月には三池伝太光世の刀身で野太刀（軍陣に用いる長太刀）の仕事を承り、褒美を頂戴している。この野太刀は金作りの定紋を彫り上げ魚々子地、七宝流し螺鈿入りという豪華なものであった。翌13年（1842）正月に書立てを持って2人扶持を頂戴している。

弘化2年（1845）には町会所において奥納戸御用が久々にあり「入情相勤め」とあって、一作につき銀3枚拝領とあるが、この頃は奥納戸の仕事も町会所経由で来たということであろうか。

同年2月に御細工所において筑前守（14代藩主慶寧）用の団扇（地板は金粉で上り竜下り竜の蒔絵を施したもの）の御用を仰せ付かり、金具は四分一で唐草を彫り上げ、地合は透かし、覆輪には唐草を彫ったものを作っている。この細工に携わった者として、蒔絵が不鳴源三郎で下地等が高橋八左衛門となっており金具は「私」となっているが、「私」は筆記者である八代であろう⁽⁷⁾。なお、不鳴、高橋の両人は古くからの御細工者の家柄であるが、

文政11年の御細工者本役兼芸歳附帳では不鳴60石、高橋42俵外5人扶持となっている。

弘化5年（1848）には北野天満宮へ献納の宝剣作りを仰せ付かったが、かつて寶暦年中に献納の例のとおり作り、首尾よく出来て褒美にあずかっている。

喬松丸（後の鳥取藩主池田慶栄）が因州へ入婿ということで嘉永元年（1848）8月に奥納戸において御差料大小の仕事を急ぎ勤めたが、同年には御細工所に召しだされて、具足の金物を三ツ葵の御紋に、また甲州流真の鞭の金具を銀無垢に牡丹唐草を彫り、見込には三ツ葵の御紋を彫りあげたが、その他にも武器の品々の御用を勤めている。

また、備後守（12代大聖寺藩主利義）の御用でも同じく御細工所において甲州流采配の金具を銀無垢で紋唐草に仕上げている。

嘉永5年（1852）には町会所において再び奥納戸御用が久々にあり「入情相勤め」とところ、「書立てを持って毎年銀150目宛拝領を仰せ付かる」とあるが、何らかの定期的な仕事を与えられたのであろうか。

安政2年（1855）5月にはお祝いということで、奥の舞台に於て中納言（13代齊泰）の能を拝見、お台所において酒肴、赤飯を頂戴し、能が終わった後、表の間を拝見「冥加の極み」と感激している。この年、齊泰は辰己用水の取水口を現在の東岩に付け替えており、あるいはその祝であったろうか。

この年、桃之助（14代大聖寺藩主利鬯）が大聖寺藩を継ぐことになり、8月に奥納戸において御差料大小の御用を承る。

特記事項として、御細工所においては近年軍御用を数多く仰せ付かり、ご用聞きの職人も多くなったということで安政3年（1856）正月、白銀御用棟取役を仰せ付けられていることがある。ここに来て初めて白銀職棟取の名が出てくるのは意外であるが、少なくとも由緒書を読むかぎりこの時が初めてである。文久2年（1862）12月に三度奥納戸御用を久々

に相勤めとあり、また書立てを持って扶持1人増を仰せ付けられ、ようやくにして計3人扶持となっている。

同3年4月には江戸表より連絡があり、御守殿（13代齊泰の正室、徳川家斉の娘）が金沢城二の丸の広敷へ移られることになったが、これまでも広敷の御用を承っていた経緯からご用聞きを仰せ付かることになった。

同年、金作りの野太刀（この場合は護身用の刀の意か）の仕事を勤め、褒美にあずかっている。なお慶応元年（1865）には町御会所の拝領銀が百目（匁）引足しとなり、都合2百50目となっている。

七代が白銀職棟取となった安政5年（1858）は金沢の町民たちが卯辰山へ上り、空腹を訴えて絶叫した事件の年であり、城下は騒然としていたことであろう。徳川幕府末期のこととして日本全体で支配者たる武士の威光は凋落期にあったが、こうした背景のもと棟取を拝命することになったのは皮肉なことであった。

棟取拝命から8年後の慶応2年（1866）7月66歳で激動の生涯を閉じている。

■八代～十代まで

八代源六光春もまた養子であり、旧姓を谷といい名は源三である。安政4年（1857）義父存命中から歴代同様に御細工所ならびに武器所の御用を仰せつけられ、同5年には両納戸御用を、6年には慶若（後の15代利嗣か）の御指料の刀の縁を赤銅に金で模様物に彫ることを仰せ付かっている。元治元年（1864）には中納言（齊泰）の官服、御指料、金作りの太刀など新調されるということで御用を承った。（この年齊泰は正三位に叙せられている）品が出来上がって、指しあげると覚書を持って金子の拝領を仰せ付かった。

なお、前年の文久3年（1863）には中納言が初めて上京することになり、水野家ではこれまで代々こうした時の御指料や太刀などの御用を勤めてきているので、現地で急なこと

でお役に立つこともあろうと、先に上京して待機していたところ、やはり見込通り太刀の修繕の仕事があり、これを急いで仕上げたので、「厚き志之旨結構」の書立てを持って金子を拝領した。

京都から戻った後の慶応2年（ということは家名相続の年）には「結構の御書立て」を持って扶持を頂戴し、同年、代が変わった慶寧（14代）の御指料や銀（しろがね）作りの野太刀の金具の御用、さらには官服の金具の修復まで仰せ付かっている。この時も出来上がったところで金子を拝領している。

同3年には慶若の弓初めがあり、水野家の家柄の先例のとおり御用を承っている。そのほか歴代同様、進物用の三所物などの数々の御用を承っている。

なお、中納言から仰せ付けられていた御指料については御好みの形で三品を、「入情相勤め」作っている所である。との記述を最後に由緒書は終っている。日付は明治3年（1870）5月で水野源六の署名があるが八代光春によるものであろう。

以降は十代朗による書き込み⁽⁸⁾や、書き遺された草稿、文書の類があるのでこれによってたどってみたい。十代朗による由緒書余白への書き込みによれば、八代光春は明治5年には早くもオーストリアの首都ウィーンの万国博覧会（開催は六年だが前年に送ったということか、あるいは朗の錯誤）に加賀象眼を出品して優賞牌⁽⁹⁾を受け、同年には大蔵省より三千円の加賀象眼大花瓶の注文を受けている。

その後も、宮内省より常にご用命を受け、皇居内御所の造営に際しては引き手釘隠し、金具等各種金工作品を命命されるなど繁く御用に預かっている。さらに、書き込みには「新政に入るとともに藩政時代の旧加賀金工約60名の活路を開くため、新時代に適應する加賀象眼応用金工作品に転向を工夫して海外輸出を企てついに成功、金沢銅器会社の設立等に尽力云々」とあり、激動の時代にあってその

指導力を発揮したことが記されている。

ただし、文中金沢銅器会社とあるのは単に銅器会社が正しいと思われる⁽¹⁰⁾。

また、記載はないが八代光春は棟取役をしていた銅器会社を辞めた後（明治12年10月／1879）には、みずからが魁春堂という工房を作り旧藩時代の職工を多数雇っていることを特筆しておかねばならない。

さすがに白銀職頭取であった七代の眼鏡にかなって養子となっただけあり、腕が立つだけでなく優れた経世家でもあったようだ。

職人集団を治める工房の親方として、初めて後藤家の支配を離れて、ディレクターとしての本来の腕を振ったのがこの八代光春ではなかったかと思われる。

その証の一端は旧藩時代には考えられもしなかった大型の象眼作品を受注していることでも推察される。そして、生地は銅器鋳物を主体に加飾は平象眼を主体にしているが、これは、丸彫ほど名人芸を要せず、代わって多数の職人に仕事を与えるという意味を持ち、産業としての適応性もよいと考えていたからではあるまいか。（写真3）

象眼も藩政時代のような黒地（鉄および烏銅）に銀を主体とした清楚なものから、輸出を考えてか様々な金属を埋める色金と鎧象眼手法で、色彩効果を高めているのはさすがである。金工技術を熟知していることからの自信であろうが、結果を信じて疑わない剛胆さも持ち合わせた人物であったと見える。

なお高岡町の家屋敷はこの八代が売り払ったため、由緒書を書いた明治3年（1870）5月には住所はご門前松原町の白銀師長左衛門方同居となっている。これより少し前、同年2月には元御細工者の役料をこの年から差し止めるとの触れが出ているところから、職人衆への支払いに困って屋敷を処分したか、と考えられるが、逆により大きな仕事をできる屋敷へ移るための計画的な売却であったか、とも考えられるのである。

八代源六光春は明治28年（1895）58歳で亡くなるが、存命中は明治維新とそれに続く廃藩置県、廃刀令といった、御用職人にとっては存亡の危機を含んだ大激動の時代であった。美術工芸界においても、美術学校が相次いで開設され、海外に目を転ずればイギリスではアーツ・アンド・クラフツ運動が起こり、ヨーロッパではアールヌーボーが各地で流行を始めるなど、ましく世は世紀末であり激動の時代であった。

●後を継ぐ九代源六光美はやはり養子であるが本名を石王次郎といい、石王家から士族中村家へ一旦養子に入った後、同家を廃絶し、水野家へ養子として入っている。なお石王家では3人の男児をすべて養子として他家へ出しており、内一人は茶釜で有名な木越家を継いでいる。ちなみに、残る一人は井波家へ入り井波塾という英語の学校を営んでいるが、若き日の文豪泉鏡花はここで英語を学び、教師まで勤めたことが知られている。これは鏡花の父泉清治が彫金師であり水野家の弟子筋であったことからの縁である。

九代について特記すべきことは、京都府の画学校（現京都市立芸術大学）に留学していることである。おそらくは養子縁組が決まったのち水野家からの援助で派遣されたのであろうが、ここに白銀職棟取なる仕事に対する水野家（ここでは直接には八代）の考え方を見ることができる。すなわち、優れた「絵」を描くことが、工芸家の第1の条件と見定めている点である。日本ではそれまで美術と工芸の明確な区別はなかったことを考えると、殊更に新しい考えというわけではないが、八代の場合には格別な意味があったと考えられる。

すなわち、かつては後藤家の支配を受けて特に藩御用の製品については強く旧方、格式を守ることが要求され、デザインは一定の枠をはずれることは許されなかったのが、その支配を離れた直後のこの当時は、みずからがデザインを構想し、描き出して職人に指図す

る必要に迫られていたと考えられるからである。

金沢区方総区長であった長谷川準也が士族授産のための銅器会社を作った明治10年(1877)はまた、大蔵省が図案調整所を開設した年であり、旧藩時代の古臭いデザインではなく、海外にも通用する新しいデザインの創作の必要性が叫ばれた時代であった。

一方明治政府は盛んに殖産興業政策を進めていたが、海外での万国博覧会への出品なども、そうした国策に沿うものであった。ただし当時の出品作は、国の体面を気にするあまり、量産性よりも仕上りの精巧さ、デザインの気品といったことに重点が置かれていた。

このため加飾の図案(絵柄)は四条派等すっきりとした構成のものが重用されていた⁽¹¹⁾。

銅器会社で2年間頭取役を勤めた八代はこうした一連の動きをことのほか敏感に感じ取っていたに違いない。九代の京都への遊学はこうした時の状況をいち早くキャッチした結果と見ることができる。画学校では日本画を専攻し玉嶂と号した。師は四条派の望月玉泉である。(写真4は九代の図案と見られる)

なお金沢では20年(1887)には納富介次郎による金沢工業学校が開校されるわけで、こうした動きも当然耳に入っていたと考えられるのだが、京都府画学校の開校は13年であり全国に先駆けて既にも実績があったことと、九代の年齢からなるべく早く就学させたいとの思いがあったのであろう⁽¹²⁾。

納富の工業学校の場合は「絵」だけでなく材料その他科学的な知識も合わせて教育しようとしており、極めて近代的なもので今日の工業デザイン教育に近いものであったのだが詳細は次報で触れたい。

九代光美は明治28年3月に偉大だった先代の死去とともに家名相続し、昭和13年3月(1938)に71歳で死去しているが、この間に加賀象眼はその最隆盛期を迎え、やがて晩年は長期低落期に入っていた。この間に日本

の工芸は美術としての工芸と、産業としての工芸・工業とに大きく2分化し、国の富国強兵策とともに工業の比重が大きくなっていったことが背景としてある。

また、世が次第に不景気となったことと合わせ、元々が庶民の生活用品とは何の関係もない高級嗜好品であった加賀象眼は、その社会的な存立基盤を次第に失っていったのであって、これは九代の指導力の限度を超えるものであったといえよう。

●十代朗は埼玉県出身であるが、幼少より書画を得意としていたところから、知人(九代の兄弟井波氏の筋という)を介して九代の知るところとなり、金沢にある工業学校で学ばせてもらえることを条件に金沢へ来て養子となったものである。旧姓は堀内で9人兄弟の末子ないしは末から二人目だったようだ、名は熊次郎であったが、本人はこの名前を嫌って朗を名乗っていた。諱は光晶(最初光朗)である。

十代は平面図案よりも立体造形に優れていたらしく、工業学校では窯業科製陶部で陶磁塑像を学んでいる。当代の旺氏によればこれは(父は)陶磁がやりたかったためでなく、彫刻ができるのは当時窯業科だけだったからと聞いているという。

いずれにしろ九代との相談の下に決められたと思われるが、日本画を専攻した九代には、これからは「形」が大事だとの思いがあったに相違ない。九谷焼などは明治の早い頃から「上絵は良いが形が悪い」ということが納富らからしばしば指摘を受けていたからである。

しかし、朗は確かに才能には恵まれていたが、ために工芸というよりは彫刻家としての道を選ぶことになり、養父の反対を押し切って東京美術学校(現東京芸術大学)の彫刻科へ進学する結果となるのである。在学中の明治42年(1909)には文部省美術展覧会に彫刻作品を出品し入選している。朗自筆の業歴書によればこのとき石川県人の入選はただ一人

であったようだ。

本学教授の木村弘道氏（日本美術史）によれば、氏がまだ金沢美大の学生だった頃、しばしば学校へ顔を出していた十代朗から彫塑の手ほどきを受けたそうで、その時の話では、朗は東京美術学校でも抜群の腕だったらしく、逆に教官が展覧会に落選するなどでぎくしゃくするようになったらしい。一方でアルバイト（いそがやという銀座の額縁屋で働いていた）に精出して学校は欠席がちであったようで、ついには出席日数不足で留年となり、中退してしまうことになるのである。

なお、石川県立工業学校在学中の明治38年（1905）に、ベルギー万国博に出品し名誉賞を受けている（写真-5）がこの作品が何であったかは定かではない。

文展入選の同じ42年には日本美術協会展に鑄金の少女像を出品して優賞を受け宮内省買上げとなっている。翌43年（1910）にはロンドンの日英博にやはり鑄金で童女像を出品して大賞を受けている。（写真-6）

こうして十代朗は金属彫刻家として確固とした地位を築き、大正4年（1915）にはアメリカ・パナマ太平洋博で名誉賞を受賞（写真-7）、さらには、同年8月農商務省より2ヵ年間米国各地の金属工芸視察を命ぜられるに至っている。

アメリカではカリフォルニア大学で講演をしたということであり、有名なエジソンにもあったことがあるそうだが（旺氏談）あながち法螺話してはあまい。前述の博覧会へは当然足を運んだであろうが、受賞式に参列したかどうかは不明である。いずれにしろ、衰退傾向にあった白銀職系統の飾り職人から、新しい鑄金銅像作家として見事に時代に即応して転身を見せたものであり、渡米の前年には金沢卯辰山に有名な日蓮上人の銅像を建立しているが、十代朗の絶頂期であった。

大正15年（1926）にはアメリカ建国150年記念万博に源六名と朗名の両方で出品、二つな

がらに大賞を受けている。（写真-8、9）このとき、金工職人の親方としての仕事と作家個人としての作品の両方を出品したものか、あるいは九代と十代がそれぞれの作品を出したものは定かではない。しかし、不思議なことにこれを最後に朗はふつりと展覧会や博覧会への出品を止めている。自筆の業歴には「その後出品製作は一切せず」とあるだけである。

その直後、大正末から昭和の初めにかけて金沢市金属工芸同業組合長に選ばれており、職人集団の一方の旗頭として、衰退する業界の指導に当たることになる。そして同時に当時の業界で対立していた町方職人系と御用職人・御細工人系との内紛に巻き込まれていくことになるのだが、そのことと以後不出品とは無関係とは言えないだろう。この間のことは田中喜男氏（金沢経済大学教授）の「加賀象眼職人」に詳しいので参照されたい。（参考文献1）

進取の気性に富み、かつ天才肌であった朗は業歴の最後に次のように記しているのみである。「以上、家業の加賀金工象眼のほか縮小機によるメダルの製作、電鑄および新合金の研究と銅像の製作を開始（原形鑄金とも自宅工場にて）日本最大の日蓮銅像のほか約60基に及ぶ銅像を作成す。（銅像鑄金法の革命）」。

しかし時代は彼に利あらず。戦中はもちろん戦後はこうした銅像の仕事は朗の懸命な受注活動⁽¹³⁾にもかかわらずほとんどなくなり、大勢の職人たちもまた離散せざるをえなかったのである。代わって登場するのは作家と呼ばれる人達であり、高橋勇（介州）氏はその代表格といえよう。

朗にとってはかつて面倒を見たこともある後輩の高橋氏が、次第に頭角を現し、美術工芸界の指導者として君臨するようになると、特に戦中は原材料の入手が厳しく、その配給権を握って絶大な権力を振るっていたことへの反発もあってか、「高橋氏は、業界の指導を

怠って自己の栄達ばかりを計っている」として新聞その他で弾劾を始めるようになるのである。ただし、この弾劾の中には工芸作品はどこまで本人が直接手を下していなければならないか、といった極めて重要な問題も含まれていたのだが、単なる中傷合戦のように一般に受け取られ、議論が深まらずに終わったのは残念なことといわねばならない。これは昭和29年から31年末に掛けてのことであるが、既に朗自身高齢のため仕事もままならず、逆に象眼業界が全体としては衰退の一途をたどるのを座視できなかつたのであろう。

こうして嫡男旺（ひかる）氏に次第に望みを託すことになるのである。しかし、何分長男は末っ子でもあり50才を過ぎてからの子であった所から焦りもあった違いない。

●以下は旺氏に直接伺った話を中心となるが旺氏は当初県立工業高校の図案科へ進むつもりで試験にも合格していたという。それを父（朗）が知人の金沢美大（当時短大）森田亀之助学長の勧めで、当時まだ制度として残っていた選科（金工）に入学させることにしたのである。

当時の教官のひとりである南部勝之進氏（本学名誉教授、金工）によれば、高校をとばしていきなり大学に入ったこともあり、また良家の末子長男として大事に育てられたせいも、性格的におとなしい旺氏は皆にかわいがられたものだといふ。

なお、その前年の中学校時代には通学のかたわら米沢弘安（後に国の記録保存の選撰書を受ける加賀象眼の第一人者）の所へ象眼を習いに行かされてもいる。さらに美大卒業後は高岡で鑄金のあらゆる修行を重ね、最後は石川県工業試験場へ入ることになるのだが、すべては父朗の敷いたレールの上をたどったということができる。加賀金工の宗家として業界をリードしていく人物に育てるには、これだけは必要と考えたすべてを息子には課したということであろう。

試験場という官職に就くことの重要性も恐らくは高橋氏との確執の中で学んだものだったに相違ない。

なお、十代朗は晩年は加賀象眼の資料を体系づけることや展覧会で世間を啓蒙することに熱心であったが、昭和40年にすべてを息子に託して79歳でなくなっている。

■時代別特色

元祖から三代までは、前田家における御用職人としての地位を固めた時期といえる。すなわち元祖は京都で後藤家に入門したことにより、後藤家が前田家から高録で召し抱えられるにともない、その有能な実働舞台として金沢へ呼び寄せられることとなったわけであり、さらには幼少の子供達を厳しく仕込んで二人の息子を共に御用職人に育て上げていることである。

恐らくこの頃は一門として共同で藩の御用に当たっていたと考えられ、由緒書にある内容も源次、源六どちらの仕事という区別はほとんどないのではないかと思われる。下る四代の記述中に太刀の仕事をした8名の名前があり、水野源六とあるべきところが源七と読めるのも、あながち書き間違えというより、一門の源七が主に参加したのであって源六は手伝ったということかもしれないのである。

とまれこの時代に水野家は御用職人として確固とした地位を築きあげたのであった。一方後藤家からは初代源六が宗家代行を命じられるわけだが、これは前章で述べたように初代好房が極めて長命であって、源次（源七）家の二代が未だ若かったことが大きな理由であろう。ともあれ、この時代に前田家と後藤家の両方からお墨付きをもらったことが、その後の水野源六家の生き方を決したといつてよからう。

続いて四代目から七代目の時代は、どちらかといえば、武家社会の中に組み込まれてしまったがゆえの苦難の時代といえるかもしれ

ない。

江戸ではとうに後藤家流ははやらなくなっており、町方彫りが主流となっていた中で、なまじ後藤家の番頭役であった水野家はみずから後藤風を破るわけにも行かず、いわば板挟みの状態にあったのではなかろうか。

衛府の太刀など格式の張った仕事が主であったと思われるが、大福帳によれば前田家以外の家臣団の仕事も多数請負っているところから、格式や故実にも明るい有能なデザイナーあるいはディレクターとしての才覚が発揮されたものであろう。

八代からはまさしく激動の時代に入るわけだが、ここではそれまで培ってきた御用職人としての経歴と、多数の高級品の仕事をこなしてきたキャリア、そして工房経営者つまり職人集団の統率者としての手腕が、遺憾なく発揮されたといえる。

九代はその日本画の素養を発揮し、象眼花瓶などの高級な装飾品を、東京や京都の一流の会社（例えば服部時計店の銀器部からの注文書が多数残っている）等と取引している。

十代は東京から帰って後はこの九代の仕事を手伝っていたが、次第に需要は下降線をたどっていたようだ。得意の銅像の仕事の方が仕事の規模としては大きく、次第にこちらの方へ切り替えたのであろうが、この仕事も戦中はもちろん、戦後もそれほどの仕事はなくなり、したがって職人もいなくなって、ついには鋳物は高岡で吹くということになってしまっているのである。

当代に至ると官民挙げてデザインの時代となる。それも旺氏自身、県工業試験場における現在の所属課が「情報指導部」であることが示すように、もの作りの世界はハイテク化が進み、それに連動する情報やデザインが重視される時代となって今日におよんでいる。

■おわりに

筆者が十一代にあたる旺氏に会ったのは昭

和40年代であるから既に20年の歳月が過ぎている。しかし歴史的な存在として氏の活動を見るようになったのはごく最近のことである。直接にお付き合い頂くようになったのは、57年度に実施された加賀象眼の製品開発研究(本学美術工芸研究所)にスタッフの一人として参加して頂いてからである。

現在氏は源六を襲名しているわけではないし、金工を専業としているわけでもない。

しかし、先の研究に研究協力者として加わって頂いたのは、単に水野家という名門の名跡を継ぐ人物だからというのではなく、氏自身が勤務先である石川県工業試験場において、現代技術による加賀象眼の応用研究（例えばメッキ象眼の応用研究）に従事したことがあり、一方で、絶滅寸前の加賀象眼業界を復興する加賀象眼伝承研究会の会長としての立場にもあったからである。だが、その水野氏といえども、かつて武士の装剣が主であった加賀金工については、今日の生活とは余りにかけ離れているため不明なことが多く、その歴史的な解明はなお深いペールに閉ざされたままである。

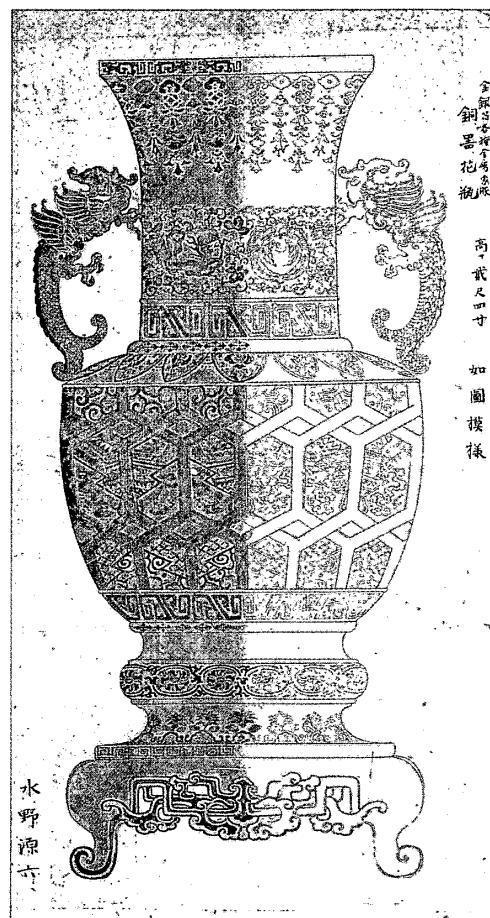
この研究は直接には水野家から寄贈を受けた図案や木型など多数の資料を目にしたことから思い立ったものだが、その後水野家には未整理の文献類が多数残されていることが分かり本格的に着手したのである。

本研究は最終的には当地方の金属工芸史を工業デザイン史の立場から読み直すことをもくろんでいるが、本稿ではとりあえずその大まかな流れを把握するに留めた。

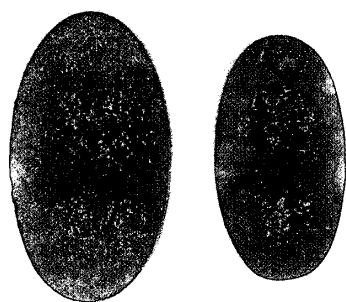
最後になったが、慣れぬ古文書を扱うため田中喜男氏始め、宇佐見孝、中野節子、瀬戸薫の各氏には大変お世話になった。また水野氏ご夫妻には何かとご協力を頂いた。記して謝意を表したい。

■註記

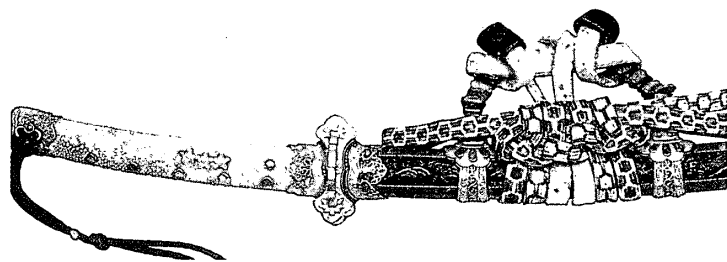
- (1) 十代朗の調べによる。
- (2) 参考文献18 南部勝之進氏による。
- (3) 町の諸役の労役や公役銀などの免除を許されたという意であろう。
- (4) 一説に、後藤本家の工人が加賀在留中に作った製品をいうとある。
- (5) 小さな半球状の突起を隙間なしに埋め尽くす技法。魚の卵子に似ているところからの呼称。
- (6) 加賀金工大鑑収載。
- (7) 七代が受けたが実際には八代が勤めたか。
- (8) 雑誌「鐺」第5巻第9号に水野家の由緒書から採ったものが載っているが、十代はその間違い箇所を訂正し、さらに欄外に情報を追加記入している。
- (9) 該当の賞状はなく、あるいは1876年の賞状があるフィラデルフィア博の誤りか。
- (10) 但し 加賀国金沢銅器会社
 制作者 水野源六 の銘の入った花瓶が存在する(加賀金工大鑑)ところを見ると、銅器会社は明治15年の改名前に既に通称として金沢が付いていたということかもしれない。
- (11) 参考文献19 16ページ。
- (12) 九代が全科目を修業して卒業したのは明治18年12月、20才の時である。
- (13) 戦後は駐留軍のアイケルバーガー中將の像までも作っている。



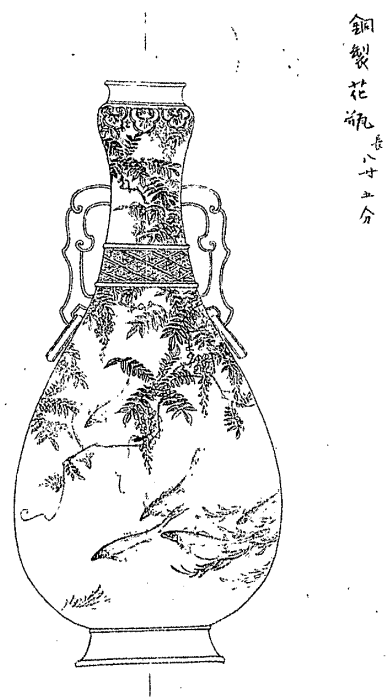
▲写真3 銅器花瓶設計図



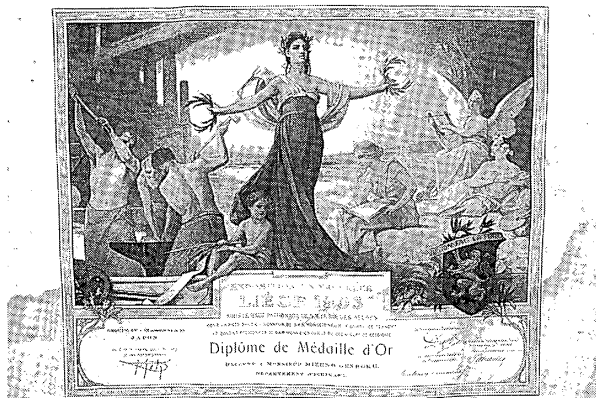
▲写真1 左縁、右頭



▲写真2 衛府の太刀 前田家伝来(加賀金工大鑑より)



▲写真4 魁春堂銅器図案



▲写真5 1905年ベルギー博賞状



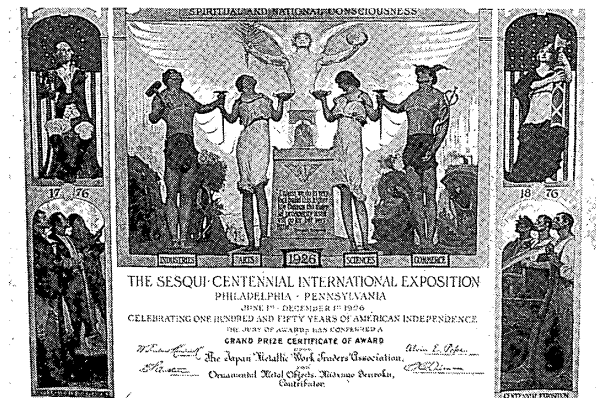
▲写真9 1926年フィラデルフィア万博水野朗名賞状



▲写真6 1910年日英博賞状



▲写真7 1915年サンフランシスコ万博賞状



▲写真8 1926年フィラデルフィア万博賞状

■参考文献

- 1 加賀象嵌職人 田中喜男 1974
- 2 城下町金沢 同上 1966
- 3 金沢の伝統文化 同上 1972
- 4 加賀藩御細工所の研究(一)
金沢美大美術工芸研究所 1989
- 5 図説万国博覧会史 吉田光邦編 1985
- 6 日本のデザイン運動 出原栄一 1989
- 7 日本の近代デザイン運動史(勸工芸財団編) 1990
- 8 東京芸術大学百年史
東京美術学校篇第1巻 1987
- 9 百年史 京都市立芸術大学 1981
- 10 県工百年史 石川県立工業高等学校 1987
- 11 九十年史 高岡工芸高等学校 1984
- 12 礎 香川県立高松工芸高等学校(90年記念誌)
1988
- 13 図案の変貌 東京国立近代美術館 1988
- 14 明治の意匠 伝統工芸高岡銅器振興協同組合
1986
- 15 九谷焼 矢ヶ崎孝雄 1985
- 16 稿本金沢史 工芸編(一) 金沢市役所 1973
- 17 加賀金工の系譜と変容 田中喜男 1980
- 18 加賀象嵌史考 南部勝之進 1986
- 19 北陸伝統産業学会誌 No.5 1990
- 20 職工由緒 金沢市立図書館 1870

(平成2年10月15日受理)